

なぎさ NEWS さ



今年も「西なぎさ」にアユがやってきた!



透きとおるような体をもつアユの子ども

アユはきれいな河川にすんでいるイメージが強いかもしれませんが、実は水族園の目の前の海、「西なぎさ」にもあらわれます。アユは秋ごろに河川でふ化した後、一度海に下り、春ごろに再び河川に遡上する「両側回遊」と呼ばれるくらしをしています。北海道の東部と琉球列島を除く日本全国に分布し、河川ではおもに中流域で見られます。

「西なぎさ」の地曳網調査でアユの子どもが見られるのは珍しいことではなく、当園の調査記録がある1999年以降では毎年100~500尾ほど、多い年では2000尾以上も採集されています。調査では11月~4月にかけて網に入ります。11~2月に観察される子どもは全長1~5cmほど、体が細長く透明で、シラスアユと呼ばれることもあり、プランクトンなどを食べて成長します。3~4月になると、全長5~8cmほどに成長し、透明だった体は銀色に変化して親と同じような姿になります。

このように、半年ほど海で過ごしたアユは、河川へ遡上してさらに成長し、秋に産卵を終えると死んでしまいます。「西なぎさ」は短い一生をおくるアユにとって、子ども時代を過ごす大切な場所になっているようです。(飼育展示係 村松 茉由子)

カンムリカイツブリの潜水時間を計ってみよう!

冬になるとユーラシア大陸の北国からたくさんの鳥たちが日本へやってきます。「西なぎさ」周辺にも飛来し、海面で羽を休め、浮かんでいる様子が見られます。ほとんどはスズガモというカモのなかまですが、よく見ると首が長く、白っぽい鳥が混ざっています。その鳥はおそらく、カンムリカイツブリです。カンムリカイツブリはユーラシア大陸やオーストラリア、アフリカなどに生息し、冬になると越冬のために日本へ渡ってきます。

カイツブリのなかまは泳ぐのが得意で、「弁足」と呼ばれる、木の葉のような形の水かきがある足を持っています。この足を使って水中を自在に潜り、魚などを捕まえるくらしをしています。カンムリカイツブリを見つけた時は、ぜひ潜水時間を計ってみてください。まずは見分けがつかないように、1羽でいる個体を探すことから始めます。そして、次は潜るのをひたすら待ちましょう。運よく潜っても、もとの場所から離れた水面上がってくるので、見失わないように、またストップウォッチを止めるタイミングを逃さないように注意が必要です。

さて、カンムリカイツブリはどれくらいの時間潜っていましたか? 少なくとも数十秒は潜っているはず。答えはぜひ実際に計って確かめてみてください。(飼育展示係 古橋 保志)

冬羽のカンムリカイツブリ



カンムリカイツブリ(左)とスズガモ(右)の足

なぎさ 生き物ミニ情報

水族園は「西なぎさ」と「東なぎさ」で、さまざまな調査を行っています。今回は、12月に行った地曳網調査の結果と1月に実施した生き物調査の結果をお伝えします。

●地曳網調査と生き物調査の結果

12月地曳網調査: 気温は11℃、水温は13℃でした。夏から秋頃に見られるサッパヤ、冬頃にあらわれるアユの子どもが採集されました。

1月生き物調査: 気温は4℃でした。干潟はとでもひっそりとして、11月には無数に散らばっていたコマツキガニの砂だんごは1つも見あたりませんでした。波打ち際には、シロチドリの小さな群れが、嘴で何かを探している様子が観察されました。